

【今週の注目疾患】

《レジオネラ症》

2026 年第 28 週に県内医療機関から 11 例の届出があり、第 28 週時点の累計は直近 10 年で最も多い 77 例となった（図 1）。

レジオネラ症は、例年、夏から秋にかけて、特に 7 月から 10 月頃に届出が多くなる傾向があるので、引き続き発生動向に注意が必要である（図 2）。

図 1: 2016 年から 2026 年第 28 週までに
県内で届出のあったレジオネラ症の届出数（診断年別）

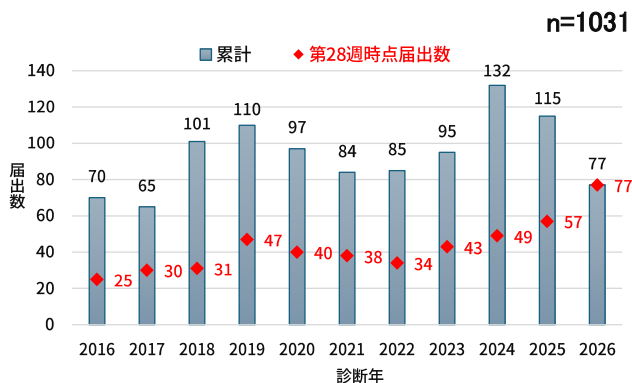
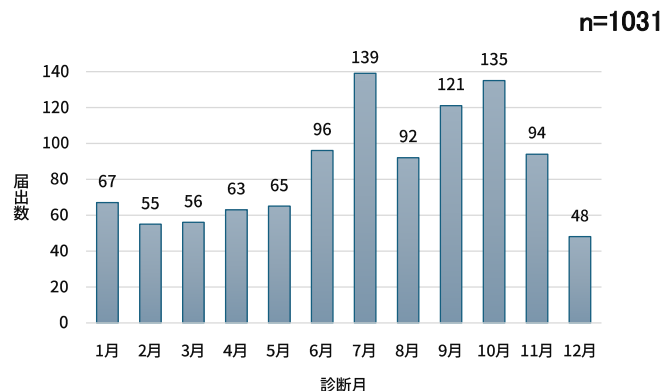


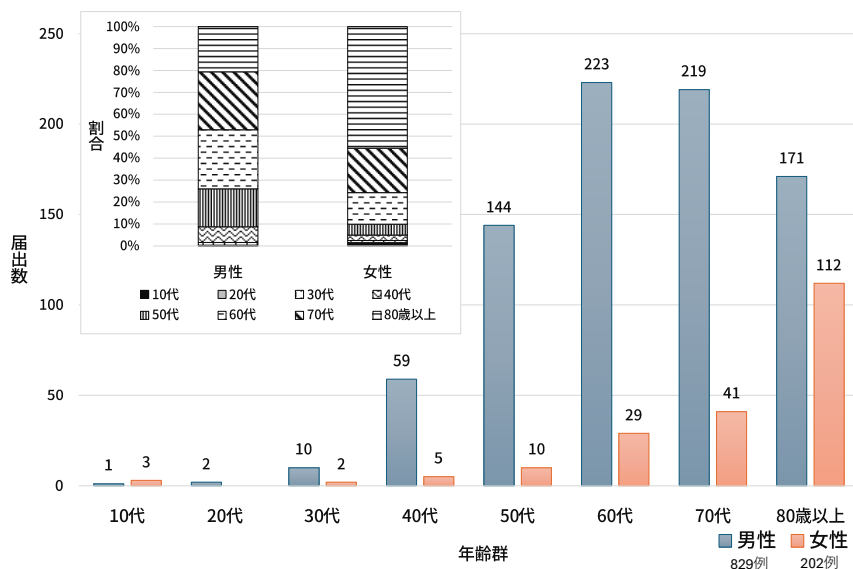
図 2: 2016 年から 2026 年第 28 週までに
県内で届出のあったレジオネラ症の届出数（診断月別）



2016 年から 2026 年第 28 週までに県内医療機関から届出のあった 1031 例の概要は以下のとおり。

病型別は、肺炎型が 973 例（94%）、ポンティアック熱型が 46 例（5%）、無症状病原体保有者が 12 例（1%）であった。性別は、男性が 829 例（80%）、女性が 202 例（20%）と男性が 8 割を占めていた。年代別では、60 代以上が 795 例（77%）で約 8 割を占めていた。男性では、60 代 223 例（27%）が最も多く、次いで 70 代 219 例（26%）、80 歳以上 171 例（21%）であったが、女性では、80 歳以上が 112 例（55%）と最も多くなっていた（図 3）。届出に記載のあった推定される感染原因・感染経路（重複あり）は、水系感染（エアロゾル感染を含む）が 275 例（27%）、塵埃感染が 67 例（6%）、その他（不明も含む）が 267 例（26%）であった。

図 3: 2016 年から 2026 年第 28 週までに
県内で届出のあったレジオネラ症の届出数（性別・年齢群別） n=1031



レジオネラ症は、土壌や水環境に広く存在するレジオネラ属菌による細菌感染症であり、主な病型として重症の肺炎を引き起こすレジオネラ肺炎と、一過性で自然に改善するポンティアック熱がある¹⁾。

レジオネラ肺炎の潜伏期間は2日から10日で、全身倦怠感、頭痛、食欲不振、筋肉痛などの症状に始まり、咳や38℃以上の高熱、寒気、胸痛、呼吸困難、下痢などの症状を呈する。また、意識レベルの低下、幻覚、手足が震えるなどの中枢神経系の症状を伴うこともある。特に高齢者、大酒家、喫煙者、透析患者、移植患者や免疫機能が低下している人もレジオネラ肺炎のリスクが高いとされている^{1,2)}。ポンティアック熱の潜伏期間は1日から2日である。突然の発熱、悪寒、筋肉痛で始まるが、一過性で治癒する^{1,2)}。

感染経路としては、エアロゾルを発生させる環境（循環水を利用した風呂、加湿器、噴水等の水景施設、空調設備の冷却塔等）を感染源とするエアロゾル感染、温泉浴槽水や河川の水を吸引・誤嚥したことによる感染、汚染された土壌の粉塵を吸い込んだことによる塵埃感染などがある。通常、ヒトからヒトへ感染することはないとされている^{1,2)}。

対策としては、風呂の配管や浴槽内に汚れやぬめり（バイオフィルム）が生じないように定期的に清掃を行うなど、取扱説明書に従って維持管理をすることが重要である。また、超音波振動などの加湿器を使用する時には、毎日水を入れ替えて容器を洗浄することが大切である¹⁾。エアロゾルが発生する高圧洗浄や、粉塵が発生する腐葉土の取り扱い等にあたってはマスクを着用して感染を予防していただきたい²⁾。

■引用・参考

1)厚生労働省：レジオネラ症

https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_00393.html

2)国立健康危機管理研究機構：レジオネラ症

<https://id-info.jihs.go.jp/diseases/ra/legionella/index.html>

《手足口病》

2026年第28週に県内の小児科定点医療機関から報告された手足口病の定点当たり報告数は、15.40（人）に増加した（図）。

現在、県内で大きな流行の発生が継続していることから、日頃から手洗いをしっかりと行うなど、感染予防に努めてください。

図：2022年～2026年第28週までの県内の手足口病の定点あたり報告数

